

アパートメント

2007(平成19)年4月10日鑑賞(東映試写室)

★★★



監督・脚本＝アン・ビョンギ／原作＝カン・プル『アパート』／出演＝コ・ソヨン／カン・ソンジ／チャン・ヒジン／パク・ハソン／特別出演＝ユミン（笹木優子）／キム・ドンウク／キム・ギョミン／オ・ジョンウォン／ソン・スンイル／ユク・ミラ（トルネード・フィルム、ハピネット配給／2006年韓国映画／91分）

……『友引忌』（00年）、『ボイス』（02年）、『コックリさん』（04年）という「ゴーストストーリー3部作」に続くアン・ビョンギ監督のホラー映画は、アパートの空間を舞台とした人間ドラマ……？ 「韓国版ホラー映画は美女でもつ」が私の持論だが、さてこの映画の主人公たちの美女度は……？ ダジャレではないが、ストーリー構成のキーとなるのは、ある部屋のキー……？ ちなみに、2005年11月の耐震強度偽装問題の発覚以来、わが国のマンション事情に不安感を増しているはずのあなたなら、主人公の住む高級マンションの広さとの対比もお忘れなく……。

やっと覚えた韓国唯一のホラー映画監督の名前……

「私はホラー映画が嫌い」と毎回言いつつ、『ボイス』（02年）（『シネマルーム2』234頁参照）、『コックリさん』（04年）（『シネマルーム7』402頁参照）に続いて、アン・ビョンギ監督のホラー映画『アパートメント』を観た。これで彼の監督デビュー作となった『友引忌』（00年）を観ていないだけになったから、韓国唯一のホラー映画監督アン・ビョンギの名前もしっかりと覚えることに……。

『リング』（98年）の中田秀夫監督、『呪怨』（02年）の清水崇監督らに代表されるジャパニーズホラーは韓国でも大人気らしいが、韓国におけるホラー映画市場はたかが知れているようで、2002年夏に韓国で公開され、大ヒットした『ボイス』でも、観客動員数は250万人。したがって、『王の男』（05年）の1300万人、

『トンマッコールへようこそ』（05年）の800万人に比べると大きな違い……。

さて、『友引忌』『ボイス』『コックリさん』で「ゴーストストーリー 3 部作」を完結したアン・ピョンギ監督が、新たに2004年5月にインターネットポータルサイトに連載されて、韓国中で反響を呼んだ漫画家カン・プルの人気漫画『アパート』を原作として描いた今回のホラー映画の出来は……？

「韓国版ホラー映画は美女でもつ」はずだが……？

「韓国版ホラー映画は美女でもつ」、これが私の持論で、そうだからこそ嫌いなホラー映画も観に行っているようなもの……？ そんな坂和基準で『アパートメント』の美女度を見てみるのも一興……？

この映画には4人の美女が登場するが、始めから終わりまで出ずっぱりの主人公が、問題の幸福アパートの向かいにある高級アパートにひとりで住むキャリアウーマンのオ・セジン。このセジンに扮するのは、『二重スパイ』（03年）でいい味を出していたコリアン・ビューティーの代表格コ・ソヨンで、私が「『JSA』（00年）の李英愛と同じような顔だちで本当に美人。日本で言えば、松たか子風か……」と表現した美女（『シネマルーム 3』76頁参照）。しかし残念ながら、コ・ソヨンはその後5年間の休養に入ったらしく、本作がカムバック第1作になったとのこと。彼女は1972年生まれだから、『二重スパイ』の時がほぼ30歳で、今はほぼ35歳。すると、いくら美女でもやはり少しその容貌に衰えが……？

やっぱり若い美女の方が……？

これに対して、本作には、これがスクリーンデビューとなるピチピチの美女が2人。その1人は1983年生まれの美女チャン・ヒジンだが、彼女が演じるのは両親を交通事故で失い、車椅子生活のまま1人幸福アパートに住むことになった天涯孤独の少女ユヨンで、辛く苦しい役……。もう1人は1987年生まれのパク・ハソンで、彼女は転校のため幸福アパートに引っ越してきた女子高生イ・ジョンホンを演じるが、彼女もさまざまなトラブルに巻き込まれていくしんどい役。

また、日本人ながら韓国名を持った女優として韓国映画で活躍しているユミン（笛木優子）が、映画の冒頭、赤い服を着た謎の自殺女キム役で登場するが、

1979年生まれの彼女も韓国版ホラー映画にふさわしい美女。彼女の出番は最初だけだが、その美女度からすればいっそ主役に抜擢してもよかったのでは……？

もっとも、アン・ピョンギ監督のインタビューによれば、原作では男性だった主人公を女性に変え、冷たくて寂しいキャラクターのイメージ表現のために職業もキャリアウーマンにしたところ、コ・ソヨンはシナリオ段階で既に念頭にあり、表情がとにかくホラー映画向きだったとのこと。さて、あなたはと思う……？

住宅事情は韓国の方が上……？

2005年11月に突然発覚した耐震強度偽装問題によって、日本国は一大パニックに陥ったが、その元凶である姉齒元一級建築士を使った「ヒューザー」が販売したマンションの売りは100㎡以上という広さ。これは逆に言えば、日本のマンションの広さはせいぜい70㎡が標準だということ……？ それに比べると、セジンが1人で住んでいる高級アパートはもちろん、その向かいにあり、飛び降り自殺が相次いでいるユヨンやジョンホンが住んでいる幸福アパートも、優に100㎡を超えている感じだから、この映画を観る限り、住宅事情は韓国の方が上……？

韓国人はカーテンをしないの……？

日本人はプライバシーの保護に敏感だから、超高層マンションで何も遮られるものがない部屋は別として、互いにベランダや窓から覗かれる危険のある部屋では、大体カーテンをしているはず……？ ところがこの映画を観る限り、セジンが南面（？）のベランダ越しに向かいにある幸福アパートの北面（？）を見ると、ほとんどの部屋がカーテンをしていない。したがって、双眼鏡で幸福アパートの部屋を覗くようになったセジンの目には、住人たちの生態が赤裸々に……。

セジンのケチのつき始めは……？

クリスマス商戦に向けた店舗のディスプレイを指揮したアパレルメーカーの販促チーム長であるセジンは、ありきたりでないオリジナリティに富む出来に自信满满だったが、それを理解できない上司はどうも不満だったらしい。そのため、急遽夜遅く店に呼び出されたセジンは、「責任はすべて自分がとる」とタンカを

切ったものの、やはり気分が減入ったのは当然。

そんなセジンの不安な気持ちに乗じるかのように、地下鉄構内を歩くセジンの後をつけてきたのが、赤い服を着た美女キム。この女はホームで電車を待つセジンの隣に立ち、「寂しくない？」と声をかけてきた挙げ句、セジンの手を取り一緒に線路上に飛び込もうとしたから大変。一瞬、セジンは女の手を振り払ったため、何とか道連れ自殺は免れたものの、キムは当然アウト……。

これに大きなショックを受けたセジンは、あれほど自信をもっていた仕事にも行けなくなり、いわば引きこもり状態に……。もともと、それによって次第にセジンの目に明らかになってきたのは、毎晩9時56分になると幸福アパートの照明が一斉に消え、それとともに誰かが謎の死を遂げるということ……。セジンはそれをすぐに、ヤン・ソンシク刑事（カン・ソンジン）にアピールしたのだが……。

刑事の頭の固さはどこも同じ……？

警察が民間人のアピールを早期にかつ率直に聞いていれば、あんな犯罪も、こんな犯罪も防ぐことができたのに……。そう思うことはいろいろあるよう……。もちろん、警察はそれを認めたくないだろうが、セジンのアピールを真に受けず、逆に「今回だけは見逃すが、覗きは犯罪だよ」とアドバイスしている（？）ヤン刑事の姿を見ていると、刑事の頭の固さはどこも同じ、とつい思ってしまったが、これは弁護士の職業病……？

警察に無視されたセジンは、やむなく自ら行動するのみとばかりに、朝のジョギング中に知り合った車椅子の少女ユヨンに対して、「10時前に電気を消さないように」と忠告したが、そんなセジンの姿に逆に不信の目を向けたのは、女子高生のジョンホン。さらに、幸福アパートの住人に対して不安をあおるような行動をするセジンに対して、幸福アパートの他の住人からも苦情の声が出てくる始末。そんな中でも、幸福アパートでは次々と猟奇的な死亡事件が続いたが、その原因は一体ナニ……？

後半やっとキーパーソンが……？

アン・ビョンギ監督のホラー映画4作目となったこの『アパートメント』の前

半は、今やアパートの部屋の中に引きこもり状態となってしまったセジンの目に映る怪奇事件・猟奇事件を淡々と（？）描いていくが、後半になってやっとこれらの事件のキーパーソンとなる男が登場する。プレスシートでもネット情報でも、その男の名前はきちんと紹介されていないが、私が「分析」した限りでは、腰まで伸びた髪から見て何年間も外に出ず、部屋の中に引きこもり状態だったと思われる謎の男がシン・ジョンスであり、異常者か正常者かの区別すらつきにくいそんな男を演じている俳優名がキム・ドンウク……。ヤン刑事とその部下のパク・キュミン刑事（キム・ギュミン）によるこの引きこもり男の取調べは見モノだが、徐々に語り始める彼の告白は想像を絶するもの……。

しかし、この映画のつくり方を見ていると、この映画はホラー映画というよりサスペンス映画といった方がいい感じも……。私がホラー映画が嫌いなのは、第1に、見るからに恐ろしくて訳のわからない化け物が登場すること、第2に、これでもか、これでもかという残忍なシーンが登場することだが、この映画ではそれは全くないからひと安心……。もちろん、少しは不気味な姿も登場するし、ホラー性を盛り上げるのに必要な効果音も登場するが、この映画における私の恐怖度はそれほどでもない……？



キーとなったのはキー……？

幸福アパート内で次々と起こる怪奇事件に対して、やっと本腰を入れて捜査を開始したヤン刑事だが、そんな場合の捜査の鉄則は、被害者の共通点を探し出すこと。それを見つければ、きっとそこから何らかの犯人像が浮かび上がってくるはず……。そんな捜査を開始したヤン刑事が発見した共通点は、文字どおりキー。すなわち、ダジャレではないが、犯人逮捕のキーとなったのは、幸福アパートのある部屋のキー。つまり、被害者たちはすべて、ある共通する部屋のキーを持っていたということだった。しかして、その部屋は何号室……。そしてその部屋の中には誰が潜んでいたの……？

さあ、ここからは映画評論に書けないのがホラー映画の鉄則。ここから明らかになる、悲しくもおぞましい人間たちの姿は、あなた自身の目で……。

2007(平成19)年4月11日記